

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

Library News

contents

目次

特集



江戸川乱歩賞最年少受賞の神山さん(法学部卒)

「本は楽しめなければ意味がない」



50回のメモリアルとなる江戸川乱歩賞に本学OB神山裕右さん＝名古屋市天白区在住＝の「カタコンベ」が受賞した。平成14年度法学部卒で、24歳。1955年創設の同賞の最年少受賞者として大きな話題になった。

「カタコンベ」は洞窟の地底湖に潜るケーブダイビングをめぐるエンターテインメント。公認ダイバーの主人公が、新発見の洞窟調査に挑む。かつて見殺しにした親友の娘も参加したが、洞窟に閉じ込められる。事故か策謀か…。

「書くことが好きです。多くの人に楽しんで読んでもらいたい。なにより本は楽しめなければ意味がないというのが私のポリシーです」と神山さんは今後への意欲を燃やしている。

講談社から「カタコンベ」が出版された8月上旬、神山さんに末岡学長の祝賀記念品が本学で贈呈された。このとき、執筆に必要な調べごとをしたいからと、本学の図書館で「図書館利用証」の発行を受けた。

また、8月下旬、名古屋の2つの書店で開かれたサイン会には客が列をつくった。誠実に応対する神山さんの人柄は評判が良い。

「人間を深く描くには、まだ人生経験が足りないなので今は手をつけなくておこうと思います。20年後にこの仕事をもし続けていられれば、人生最高に幸せです」と言うのだ。

PROFILE

1980年愛知県生まれ。名古屋経済大学法学部卒。アルバイトをしながら作家を目指し、各新人賞に応募してきた。『カタコンベ』で第50回江戸川乱歩賞を最年少で受賞。



随想	2
短期大学部助教授 日比野光敏	
国内外の図書館	3
経営学部教授 柴田 良一	
読書ガイド	4
経済学部教授 伊藤 利明	
経営学部教授 伊藤 俊雄	
法学部助教授 中元 初美	
短期大学部助教授 水口美知子	
学生コーナー	6
山崎 将久	
伊藤 隆夫	
遠藤 裕樹	
瀨嶋 明香	
図書館からのお知らせ	8



参考文献・引用文献について



日比野光敏

特に、文献を引用することの多い学生諸君に言いたい。「書物に書いてあることを鵜呑みにするな」と。何にでも句はある。本だって当然「賞味期限」というのがあるのだ。

「当たり前だ。今年のディズニーランドへ行くのに、昨年のガイドブックなど持って行くものか」と言う君。そのとおりである。情報は日進月歩、常に動いているものだ。

ところが、である。これがレポート作成の場合だと事情が異なってくる。

たとえば私が「～について、最近の事例を挙げつつ説明せよ」と課題を出す。多くの学生諸君は図書館などの世話になる。「最近の事例」を書物に頼るのである。

そのこと自体にたいして問題はない。ただ、情報があまりに古くさいのである。そしてそのことに、あまり本人が問題にしていない。これは、コトは大きな問題だ。

「日本のデンマークと呼ばれている安城市では…」
「羽咋市内を突っ走る小さな電車に乗ってみると…」
「〇〇地方には、(田舎だから)テレビのチャンネルはNHK2局と民放が1局しかなく…」(事情の知らない人のために言っておくと、これらは「現状」の話ではない。みんな、過去の話である)。これらは氷山の一角なのだ。自分の中で不自然でないだろうか。いやそれ以前に、「いつ頃書かれたものか」、自分で心配にならないのだろうか。

時として私は言う。「君ねえ。安城市が日本のデンマークと呼ばれてたって、いつのことだか知ってる?」と。それに対して、自分の「過ち」を認めるものはごくわずか。多くの学生は、「だって、あの本に

載ってました」。ひどくは「先生はあの本に載っていることがウソだというのですか?」

私はレポート課題として「最近の事情」を尋ねているのだ。安城が日本のデンマークと呼ばれていた時代、そんな昔のことはどうでもよい。羽咋市に近郊列車が走っていたのも、〇〇地方にテレビのチャンネルが3局しかなかったのも、(程度の差こそあれ)とっくの昔の話。にもかかわらず、彼らの言い分は「あの先生は、公刊されている本を引用しても文句を言う」となる。

こういう時、あの彼の「名言」を引きたい。「今年のディズニーランドへ行くのに、昨年発行のガイドブックを持って行くものか」と。

参考文献、中でも引用文献の中で最も大事なことは、筆者がだれであるか、出版社がどこであるか、もさることながら、その記事がいつの時点で書かれたか、明記されていることだ。さもなくばその「筆記時期不明の記事」など、「怪しげなもの」としての性格を有するに至る。「わけのわからない『昔』の話はどっちでもいい。重要なのは『今』の話」なのだ。

ある大学へ非常勤講師に行った時、私は私の専門である「すし」について講義をし、授業の感想を求めた。ひとりの学生が「先生と同じようなこと、やってる人、いるんだね」と言い、本を取り出した。『すしの歴史を訪ねる』。拙著である。その本を書いた人間が、目の前にいるのである。が、知る由もない。

う〜む。やはり、著者のことにも気にかけてほしい、か。
(短期大学部助教授)



福州大学図書館

経営学部教授 柴田 良一



昨年度一年間の在外研究で、福州大学に滞在していました。福州大学は中国福建省の省都福州市にある大学です。図書館を紹介する前に、福建省と福州市について簡単に紹介します。日本では、福建省は「蛇頭」、「烏龍茶」と「華僑の故郷」として知られていますが、これ以外のことは、ほとんど知られていません。日本との関係も古く、平安（唐の）時代の僧空海が最初に唐の地を踏んだ地が福州です。昨年が丁度入唐 1,200 年の記念すべき年でもありました。さらに、茶の湯の世界で珍重されている「天目茶碗」は福建省の北西にある武夷山麓の建窯で焼かれ遠く日本まで運ばれてきたものです。福建省の南の沿岸都市泉州とアモイはお茶と焼き物の積出港として有名です。特に、泉州は宋の時代における海のシルクロードの起点で、その時代の香りを残す美しい港町です。

福州は、福建省の北の沿岸都市で、ミン（門がまえに虫）川の河口に開けた港町です。中国における 80 年代からの開放政策の中でいち早く開放された都市の一つです。人口は約 600 万人で、都市部には約 200 万人の人が住む都市で、中国においては中規模都市の一つです。日本からも大手企業が進出し、企業の駐在員や留学生を含めて約 500 人ほどの日本人が住んでいます。しかし、街で日本人と会うことはありませんでした。福州の人達は平

均的な中国人と比べたいへん豊かな生活をしています。

福州大学は 1958 年に創立された比較的新しい大学です。理工系を中心にして 21 の学院と大学院から構成されています。在学生の総数は約 26,000 名、うち約 1,600 名が大学院生です。図書館は大学の創設と同時に設置され今年で 46 年目を迎えています。図書館の総蔵書数は 110 万冊、雑誌の総数は 20 万冊です。年間の利用者数は 50 万人、年間の貸し出し図書数は 30 万冊にのぼります。平日の開館時間は朝 8 時から夜 10 時までの 14 時間、土日は 13 時間半です。また、本学の図書館と同じように internet 経由のサービスも実施しています。図書館内には 1,500 の閲覧用机が用意されており、いつも学生でいっぱいです。学生は基本的に寄宿舎生活ですので、勉強は大学の教室または図書館でするため、週末の土日でも開館しています。図書館には情報に関する最新の真新しい図書から、補修に補修を重ねた図書まで置かれていました。特に、補修を重ねた本が目につき、学生の学ぶ意欲が伝わってきました。これが中国の力の源泉なのかと考えさせられました。



河上 亮一 著

『学校崩壊』

(P.221) (草思社)

経済学部教授 伊藤 利明

小学校で、学級崩壊が起きている。授業中、立ち歩くという行動について、一年間で「よくあった」「あった」と答えた教師が34パーセント、注意するとカットとなってキレル状態の子が「いた」と答えた教師が35パーセント、自らが学級崩壊を体験したと答えた教師が8パーセントいる。

学級崩壊とは、子どもが立ち歩くなどして、授業が成立しないことを指している。小学校で学級崩壊があれば、大学で授業が騒がしいことも理解できる。

河上氏は、学級崩壊を子どもたちが変化したことから生ずる現象だと分析する。子どもたちは、「社会的自立」が身につけていないのである。「社会的自立」とは、「一人前の社会人として生きていくのに必要な基礎的な力を身につけさせること」である。子どもたちは、「ひ弱」になり、「頑固」で「わがまま」になった。前者については、席にきちんと座ったり、朝会で立っていたりできなくなっている。はしの持ち方、御飯の食べ方などの基本的な生活習慣も、身につけていない。後者については傷つきやすいので、他者を受け入れることができない。人間関係が希薄になっている。

本書は、騒がしい授業の背景を示唆している。騒がしい子どもたちを注意したり、教材を工夫することは重要である。さらに重要なことは、子どもたちの変化を理解することである。



井上 靖 著

『あすなる物語』

(P.224) (新潮文庫)

経営学部教授 伊藤 俊雄

『あすなる物語』は、主人公梶^{かじ}鮎^{あゆ}太の幼年時代から壮年時代までの人生を、個性豊かな六人の女性との出会いの中で、人として成長していく様を淡々と描いたものである。

悠久なる時の流れの中で翻弄される人間の頼りなさ、はかなさを、歴史小説、恋愛小説のなかで描き続けた井上靖の文学には、功利とか、金銭とか、名誉などの世俗的欲望とは無縁で、無垢ないじらしい存在としての人間たちが数多く登場するが、この小説においても同様の世界が広がっている。

「あすなる(羅漢柏^{ひのき})は檜^{ひのき}になろう、あすは檜^{ひのき}になろうと念願しながら、ついに檜^{ひのき}になれないというあすなるの説話は、幼時の私にかなり決定的な何ものかを植えたようです。あすなるの説話のもつ哀しさや美しさを、小説の形で取り扱ってみたものです」と井上自身が語っているように、明日は檜^{ひのき}になろうと思いつつ、永遠に檜^{ひのき}にはなれない宿命^{あすなる}を背負った^{あすなる}人間の切なさと哀しさが、真っ直ぐ伝わってくる。

「あなたは翌檜^{あすなる}でさえもないじゃありませんか。翌檜^{あすなる}は、一生懸命に明日は檜^{ひのき}になろうと思っているでしょう。貴方は何になろうとも思っていないじゃない」との信子の言葉にはどきりとさせられるが、主人公の持つ劣等感、母性思慕が、心象風景と重なり、悩める読者に素直に入ってくる。

「人の世は四苦八苦の世界。けれどこの世は美しい」とのお釈迦さまのお言葉どおり、生きてゆくこと、歩みを続けることこそが尊い。そう感じさせてくれる小説である。



芳賀 徹 著

『詩歌の森へ』

(P.362) (中央新書)

法学部助教授 中元 初美

「日本詩へのいざない」、と小見出しの付けられた本書は、日本語の美しさ、日本語によって綴られた日本の詩歌の美しさと豊かさを今一度喚起させる。全143章は日本経済新聞に平成11年4月から14年末まで連載されたもので、著者自身の言葉によれば、一比較文学者の日本詩歌鑑賞集である。万葉集から始まり、数編の訳詩を含めて、現代俳句まで、縦横無尽に採択されている。百聞は一見に如かず、四つ挙げてみましょう。

- ・此春は、花にまさりし君持ちて、青柳の糸、みだれ^{そら}春
- ・その子^{はたち}二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな
- ・名を換へよ騎士と夏山^{なれ}誰が世ぞ
- ・なぜ生きているかって、
さあねー。

新妻を娶ったばかりの江戸時代の粋な愛の歌、有名な日本女性史における革命的短歌、太平洋戦争末期の一兵士が祖国への決別を歌った歌、形而上学的な韓国の訳詩。知っている、いないにかかわらず、どれも私たちの感性にうたえるものばかりです。時には詩歌の森で道に迷い、哲学の分野に足を踏み入れたり、絵画の世界に導かれる事もあるでしょう。また、女性史や日本のフェミニズムに目を開かれるかもしれません。それもまた、詩歌を読む楽しみの一つなのです。目的達成のために、日々、最大の手段として用いられる言葉ですが、めまぐるしい現代生活の中でやせ衰えていく危機感を抱いている人も少なくありません。少しの間立ち止まって、私たちの先輩たちが築きあげてきた言葉の造形の遺産に触れてみる事は、国際社会における日本人としての究極のアイデンティティの確立にも役立つものと思われま

長谷川 哲夫 著

『お客様を100%満足させる—

ソニーの「CS100」に学ぶ、伸びる会社の顧客戦略』
(P.202) (日本文芸社)

短期大学部助教授 水口美知子

「それでお客様は満足ですか?」「顧客を自社商品購入の客だけでなく、社内外の全ての人—自分以外の全てと考えよ」「クレームを宝の山と考える」など様々な刺激的な言葉が目飛び込んでくる。

皆さんは、将来入社する会社が製造・販売部門を問わず、常に顧客意識が大切であることは周知していよう。

本書は80年代後半から90年代にかけて日本で実施された「顧客満足の向上運動」の失敗要因を、アメリカのCS=customer satisfactionの表層的な部分だけを導入した結果であると捉えている。笑顔、親切、感謝という顧客に対する親切運動が真の顧客満足につながらなかったことを踏まえ、顧客の視点に立って会社の内外で発生する課題、問題を0にする「仕組みづくり」と全社員の「行動革新」が顧客満足になり、ひいては売上、利益の増大につながると力説している。優良企業であるソニーグループの成功例から、様々な経営や販売の方策を提示し、読者の意識改革をはかろうとする実践の書で、読めば明日からでも意識が変わり、行動が変わる実用書である。

あるべき姿と現状とのギャップ、すなわち問題点を意識することから始まり、問題が生じたときは、それを全部署、全社員が共有するためのシステム構築とコミュニケーションの必要性、報告を受け入れる自由な風土、why-becauseと要因を探り、他責から自責とする意識改革、原因の分析と即座の対策、ひいては問題未然防止型企業への行動力を主眼に具体的に解説している。

何やら最近の問題企業、倒産を余儀なくされた企業への参考書のようなですね。



茅田砂胡 著『スカーレット・ウイザード』を読んで

経済学部2年 山崎将久

電車に乗っている時、漫画や雑誌を読んでいて、面白くて吹き出してしまい、周りから白い目で見られたことは無いだろうか？バイト中や授業中に突然思いたし笑いをしてしまい、咳をする振りをしてみても覚えは無いだろうか。

この本はそのような危険を大いに孕（はら）む小説である。

『スカーレット・ウイザード』は、宇宙を舞台とした、とある夫婦の「愛」と「暴力」と災害レベルの「非常識」を売りに大暴れ（これでも過少評価である）の怪獣達（あくまで人間です）が織り成す、「ハーレー・ロマンズ・バイオレンス・エセSFファンタジー・ノベルズ」(?)である。

つまり一度怒ると、辺りをペンペン草すら生えていない程の荒野に変えてしまう規模の大爆発で、これでもか、という勢いで突き進む怪獣夫婦を、イチャ×2・ラブ×2させようとした無茶無謀の著者が、勢いに任せて書き進めたと思えない不朽の大傑作である。

超新星爆発レベルの「非常識」や論点のズレまくった口論、登場人物の「常識」を銀河の彼方にある某温泉宿に傷心旅行へ連れて行ってしまう程のブツ飛ばされた理論&夫婦喧嘩が繰り広げられたり、また、全身に鳥肌が立つ程の名言&吹き出してしまう迷言が随所に盛り込んであり、気を抜いていると確実にヤラれてしまうので気を付けねばならない。

しかも、ただ面白いだけでは無く、綺麗な日本語表現で書かれている。「漫画本」や、「全く興味が無く、ゼミの課題として出されたので、嫌々ながら読まなければいけない本」を読むよりず〜っと簡単に、日ごろ余り使われることの無い日本語が無意識に勉強できるので、意外と漢字検定や文章検定の手助けとなったりする。「万事塞翁が馬」である。

『抱・腹・絶・倒』が体感でき、かつ、楽しみながら表現を学ぶ事ができる。このような体験をしてみてもはどうだろうか？



さだまさし 著『解夏』を読んで

経営学部3年 伊藤隆夫

ベ— チェット病。視力が徐々に失われていき、完治するまで口内炎などの症状が出る病気。完治するのは病気が眼を食い終ったとき、つまり失明するときである。

この病気にかかった隆之の視点から描かれる物語は、正直なところ読んでいて気が滅入る。それは「失明しないように手をつくす」といった闘病生活を描いた作品ではなく、「失明するまでに事実をどう受け入れようか悩んでいる」様子が描かれているからだ。

ならなぜこの作品を推すのか。それは、最後の隆之の姿がそれまでの重苦しさを解くものであるからだ。ただ「強い」と、そう感じた。

これを読む前は闘病生活を描いた作品の方が、「何かに向かい必死になる」生き方こそ

が「強い」のだと思っていた。だが、間違っていた。「自分の選んだ生き方の中で何かに対する答えを見つける」、人はこうあるべきなのだと思う。

「何か」と言うのは、様々にあるはずだ。隆之のような病気だけでなく、人の死の悲しみだったり、背負った罪の意識だったり、叶えたいと願う夢だったり、自分の「何か」がわからない漠然とした不安だったり、人が生きる先には、そんな重苦しいものがある。それでも、越えていける。人の手を借りてもいい、少し立ち止まってもいい。きっと越えていける、あなたの選んだあなたなら。今、迷っているあなた、是非御一読を。



テロは大量無差別殺人以外の何ものでもない。

法学部2年 遠藤裕樹

イラク ロシア など最近いろいろな所でテロが起こっている。テロを起こすものは少数民族など国の統治の仕方などに不満を持っている者たちである。テロはそういった不満をその国の国家や世界中に主張するためのひとつの方法だと思う。しかし、そのために犠牲になるのは、何も関係のない人々である。上記で、テロは主張するためのひとつの方法と言ったが、こんなのは主張でもなんでもないと思う。何か理由があるから、主張したいことがあるから、それで殺人が正当化されるわけがない。どういふ経緯でテロしかないという最悪の決断に達したのかは分からないが、テロは大量無差別殺人以外の何ものでもない。

そして、アメリカ。9・11で多大な被害を受けた。しかし、その後アメリカがとった行動は、国連無視の単独でのイラクとの戦争突入である。これは、復讐というよりも、レベルの低い、やられたからやり返すと言った仕返しに思える。つまり、アメリカは、テロという大量殺人を犯した者たちに法など関係なく、自らが私的に戦争という名の下に処刑を下したのである。しかし、その結果何の関係もないイラク国民が巻き込まれている。やっていることはテロと変わらないのに戦争というだけで殺人が正当化され、アメリカには何の処罰もないのである。

世界平和・No Poison を願います。



金原ひとみ 著『蛇にピアス』を読んで

短大・保育科1年 濱嶋明香

この作品 について、私は、弱冠20歳の作者が第130回芥川賞を受賞したということで話題を呼んだことは知っていたが、タイトルにもあるように身体改造や刺青が描かれているということから、まったくと言っていいほど興味がなかった。そんな私が、この本を読むことになったのは、小説好きの妹の勧めがあったからだ。

最初あまり気乗りのしなかった私だったが、読み進むうちにどんどんこの作品の世界に引きこまれていった。それは、おそらく私の知らない、自分では体験する勇気もてない世界のことだったからにちがいない。

小説の中の登場人物は、私の周りにも、また友達にもいない人種だった。彼らのような存在を、私は今まで、怖い、ひどい、

がらが悪い、そして常識や知識が足りない、などとさげすんでみたり、ばかにしているところがあり、彼らの服装やスタイルを見ていると、どうしても理解できないところが多かった。

しかし、この作品を読んで、彼らの「楽しいことを見つけたい」「自分の好きなことをやりたい」という気持ちが理解でき、人は顔や性格が一人ひとり違うように、服装やスタイルそして考え方が違うのだということを再認識させられることになった。どのような人間も幸せを求めるといふのは当たり前なことであり、ただ幸せを求めるまでの順序や方法が違うだけのことにはすぎない。この作品を読んで、私はそのことに気づかされたのだった。

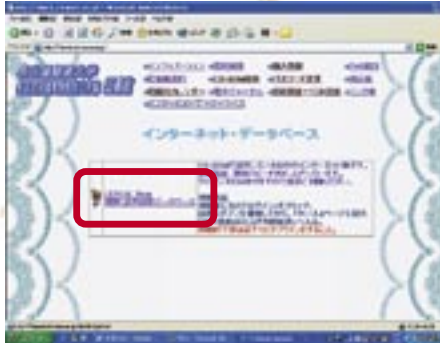


お知らせ Information

■名古屋経済大学図書館

(URL:www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html)
ホームページからのご案内

LEAGAL Base判例・法令検索データベースと接続しました。



CD-ROM で提供しているもののインターネット版です。更新頻度、検索スピード共に上がっています。論文作成のためにぜひご利用ください。

図書館 2 階パソコンコーナー、情報センター、サテライト、研究室より利用できます。なお、図書館 2 階～5 階の OPAC 検索端末からは利用できません。

<利用方法>

●画面左の「ログイン」をクリックします。

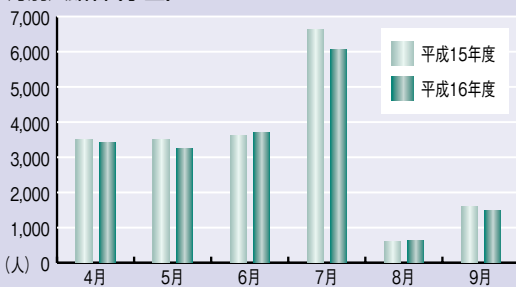
●自動ログインを確認してから、「ホーム」ページに戻り、「法令検索」または「判例検索」へ入ります。

●利用終了後は必ず「ログアウト」をしてください。

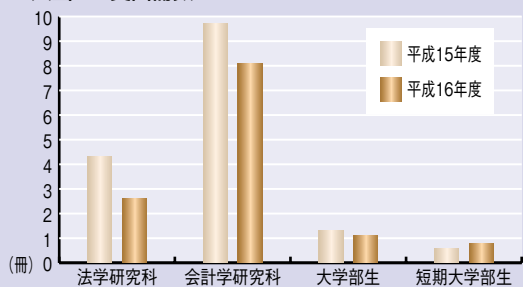


■図書館利用状況(4月～9月末の半期)

月別入館者(学生)



一人当たりの貸出冊数



■『白穹』から『図書館だより』へ

1980年9月創刊号から2004年4月47号まで図書館報は『白穹』の名称で親しまれてきました。旧図書館の明り取りのドーム(穹蓋)から命名されました。2000年4月より現在の図書館に移転し、館報の名称を今回より『図書館だより』に変更しました。今まで以上に利用者の方と図

書館のコミュニケーションの場になるよう努めていきたいと思っております。皆さんのご意見や寄稿をお待ちしています。

■寄贈ありがとうございました

短期大学部 川勝泰介先生から多数の絵本を寄贈していただきました。絵本は「絵本ライブラリー」で閲覧できます。ありがとうございました。

■図書館利用状況について

学生のみ皆さんの利用状況を棒グラフで示してみました。月別入館者数、研究科・大学部・短期大学部生の一人当たりの貸出冊数に分けました。まずは図書館に足を運んでください。

図書館だより Vol.48 2004.11

発行所 名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部 〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
<http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>

発行年 2 回

印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171